

## 解釈文法の立場より：「もぞ」・「もこそ」についての私見

福田，益和

<https://doi.org/10.15017/12186>

---

出版情報：語文研究. 31/32, pp.90-100, 1971-10-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 解釈文法の立場より

——「もぞ」・「もこそ」についての私見——

福田 益和

中古・中世の文学作品を正確に理解するための一助として、「もぞ」・「もこそ」の解釈の方法について私見を述べてみたい。

「もぞ」・「もこそ」が一般に「好ましからぬ予想」とか「危惧」とかの意をあらわす場合には、そこに、ある定まつた文型があると考えられるのであって、その様相については既に論じた通りである。<sup>(注1)</sup>すなわち、「もぞ+述語」・「もこそ+述語」の文形式で、「もぞ」・「もこそ」と、各その述語の間に他語の介在がなく、しかもその述語がそこで終止するか、ないしは省略されるかのいずれかの場合において「危惧」の意をもつことができると考えられる。このことは、「もぞ」・「もこそ」と、その述語との結合の緊密の度合のつよさをも意味し、「もぞ」・「もこそ」と、それに直結する述語とが一体となつて、いわば「完結した陳述」の機能を有していると考えられる。そうして逆に、その場合にかぎって、「危惧」の念をあらわす意味が分出してくると思われる。

以上の観点より、「もぞ」・「もこそ」の意味を吟味して行くとき、例えば本居宜長が、「詞の玉緒」において「行末をかねておしはかりて、あやぶむ意のてにをは也」として例歌を数首あげたその次に、「又同じ意ながらあやぶむことはなきもまれに有<sup>(注2)</sup>」として例示した「もぞ」・「もこそ」の意味については再検討の必要あるものがふくまれているごとくである。この点については既に松尾聡氏が枕草子・源氏物語にあらわれる事例を中心に述べて居られる。<sup>(注3)</sup>しかし、前稿<sup>(注4)</sup>においてはこれに言及することができなかったもので、本稿においては氏のあげられた問題の事例を中心に、氏の所説をとりあげながら論じて見たいと思う。拠つたテキストとしては日本古典文学大系所収のものはその本文により、その他国歌大観、続国歌大観本（和歌）、角川文庫本（「とはずがたり」）、岩波文庫本（「古本説話集」）等である。各事例の作品名の下にか、げるカッコの無い算用数字は拠つたテキストのページ数、（）の中の算用数字は、国歌大観、続国歌大観の各番号である。

まず、文例をいくつかあげる。

(1) いなやきじ人にならせるかりころもわが身に触れはうきか  
もぞつく(大和物語 335)

(2) 下十卷あすにもならばことをもぞ見給ひあはする。こよひ  
さだめむ。(枕草子 清涼殿の 62)  
丑寅の隅

(3) 山崩なば、うちおほはれて、死もぞすると思へば(宇治拾  
遺物語 唐卒都婆 112)

(4) いかにして暫し忘れむ命だにあらば逢夜のありもこそすれ  
(拾遺集 646)

(5) 身にかへて綾なく花を惜む哉いければ後の春もこそあれ  
(拾遺集 64)

(6) 天の川流れて恋ひばうくもぞある哀と思ふせに早く見む  
(後撰集 233)

右六事例いづれも仮定条件を伴って表現されているところに  
まず注目すべきである。さらに、「もぞ」・「もこそ」の文型  
はいづれも述語(「つく」「見給ひあはする」「する」「すれ  
「あれ」「ある」)と直結し、更に各述語は一応ここで切れて  
いる。故に右の六事例いづれも「危惧」の念をあらわすものと  
考えてよい。こ、で注意すべきは、「もぞ」・「もこそ」の文  
型が仮定条件表現とそれぞれ呼応しているながら、その結びとも  
いへば述語が、推量の助動詞「む」等を伴わないという事実  
である。宜長が「但しんと結べる例はなし。せんなど、いふべ  
き所をも、するとやうにむすびたり」とつとに指摘したのは当

を得ている。以後この事実は広く認められてはいるが、より大  
事なことは、この仮定条件表現を「もぞ」・「もこそ」の文型  
との呼応関係でとらえることである。

松尾聡氏が、仮定の条件があるときでも、述語は動詞の原形  
を用いるとして例歌を二首あげて居られるのはその意味で首肯  
できるが氏の場合、仮定条件表現と「もぞ」・「もこそ」に直  
結する述語との呼応関係の中で、述語の性格を把握するという  
点が稀薄のようにも思われる。「もぞ」・「もこそ」に直結す  
る述語が、いわゆる動詞の原形でもって終止しながら、「行末  
をかねておしはかりで、あやぶむ意」(○印筆者)を持つことが  
できるのは一面、「もぞ」・「もこそ」の「も」の語性によると  
も考えられるが、しかしその直接の要因は、仮定条件表現との  
呼応関係による「将来への志向」にあるものと考えたい。その  
ようにみえてくると、「もぞ」・「もこそ」の文型は、その前件  
として仮定条件を伴う場合を常態とみることができるとはな  
からうか。むしろこのような立場に立つてこの文型をながめる  
と、仮定条件を伴わない「もぞ」・「もこそ」の文を解釈する  
にあたって、新しい展望がひらけてくるものと考えられるので  
ある。

次に問題となるのは、前件として仮定条件を伴いながらも何  
故、その述語に推量の助動「む」などを用いず、いわゆる動詞  
の原形をもって終止するかということである。この点について  
は、江口正弘氏の説もあるが、全面的には従いがたい。江口氏  
は、源氏物語における「もし」を伴う文型に着目し、

「もし………もや ……結(推量) (以外)」  
もこそ

「もし……や……<sup>へき</sup>」という二つの文型の対比の上において、「結び」に推量の助動詞を用いないのは、「もし」という副詞との呼応にあるとして、「もし」の語性より「仮定的な気分をもって表現されているのではないか」と指摘して居られるごとくである。右二つの文型の中、前者の場合において、「結び」が「推量以外」の、すなわち、原形でもって用いられているということが、「もし」との呼応関係によって把握されたために、氏のごとき結論が出たものと考えられる。「もし」の存在に着目された点は多とするが、この事実をもつて、ただちに「もぞ」・「もこそ」の文型に適用して、動詞の原形でもって終止する理由にされるのは問題ではなからうか。何よりも注意すべきことは、「もぞ」・「もこそ」の文型に呼応すると考えられる仮定条件句が、いずれも「わが身に触れば」、「あすにもならば」等と、「もし」を伴っていないという事実である。当然「もし」を伴っていない、はずの条件句がいずれも「もし」を伴っていないという事実を重視したい。むしろ、疑問副詞「もし」が、「もぞ」・「もこそ」の文型に呼応して用いられるようになるのは二次的なものであって、既に言及したごとく、「もし……や」・「もし……か」・「もし……もや」のごとき呼応関係が既に一方では存在して居り、この「もし」の用法が「もぞ」・「もこそ」の文型にも波及して、二次的に、「もし……もぞ」・「もし……もこそ」のごとき文形式が成立したとみるのが妥当ではないだろうか。よって、

(7) もし世におはする事もこそとて、ことづけたまふものある

やうにき、し。御文にはさきもか、れざりし。(浜松中納言物語三、274)

のごとき文例は、「もこそ」の次に結びが省略された形式ではあるが、既にあげた事例と本質的には同質であると考えられるので、この「もこそ」は「危惧」の意味を有しているはずである。ところが、日本古典文学大系の校注者松尾聡氏はこのところを「ひよつとして(母君が)御存命のこともあろうとて私(中納言)にたのんで言いおくりなさるものがあるように聞いたなあ。(だが)お手紙にはそうもお書きになつていなかったなあ。」と「期待」の意味(氏自身は明記しては居られないが)に訳して居られるごとくである。氏は更に補注において、「このあたりの意味は再考したい」として、「危惧」の意にもとれる可能性を示して居られる。右の文例(7)が「危惧」、「期待」の意味のいずれにもとり得るといふ文脈のあいまいさが、「もし……もこそ」の結合の二次性を暗示しているものともうけとられるが、この浜松中納言物語の場合は、松尾氏が初めに訳されたごとく、「期待」の意味がこめられているとみるのがい、と思う。何故ならば、文例、

- (8) 河、底<sup>モ</sup>不知<sup>ズ</sup>深<sup>キ</sup>沼<sup>ノ</sup>様<sup>ナル</sup>河<sup>ニ</sup>テ<sup>ハ</sup>有<sup>ル</sup>。<sup>三十一の287</sup>「若<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>気<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>」  
、河<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>様<sup>ニ</sup>差<sup>シ</sup>上<sup>テ</sup>ル<sup>程</sup>ニ。(今昔物語集十一の287)
- (9) 「悲哉我<sup>レ</sup>母<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>事<sup>ニ</sup>。但<sup>シ</sup>、我<sup>ガ</sup>母<sup>存</sup>生<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>、若<sup>シ</sup>我<sup>ガ</sup>為<sup>ル</sup>遺<sup>シ</sup>置<sup>キ</sup>給<sup>ヘ</sup>ル<sup>財</sup>有<sup>ル</sup>」。(今昔物語集九の195)

(10) おとこに物し給はましかば、もしこの世にわたり給事もやと、待ち待なましを、それさへいみじくうちおしう心憂く、

(浜松中納言物語二260)

(11) 「もし暗まぎれのひまもや」と、内侍の督の上り給ぬるよ  
り、やがて侍ひ給ひて、うかッひ給へど、(夜の寢覚三、196)  
(12) 「この人ゆへこそ、もし姨捨ならぬ事もやと、思ひよりき  
こえさせしか。」(夜の寢覚四、319)

において、疑問副詞「もし」と呼応している「や」・「か」・  
「もや」の意味を吟味してみると、文例(8)は、陸奥国の安倍頼  
時が、胡国に新天地を求めて行つてその途次、河中で迷つてし  
まい人恋しく思っているのであるから、人間の存在を切に「期  
待」しているものと考えられる。次に、文例(9)は、幼い時、母  
に死にわかれた震旦の張敷が亡き母の形見がありはしないかと  
「期待」している意味であろう。文例(10)について松尾氏は同書  
頭注において、「もしその人が男でいらつしやるのだったら、  
ひよつとしてこの国(唐土)にお渡来下さることもあろうかし  
らと、きつと待ちましようものを……」と訳され、文例(11)(12)に  
ついて阪倉篤義氏は同書頭注において「闇に紛れて寢覚上に近  
づく隙でもないか。」「この寢覚ゆえにこそ、あるいは慰め  
られることもあろうかと、(女一の宮に)思いより申したのだ  
が」と、いずれも「期待」の意味にとつて居られる。すなわち、  
「もし……や」・「もし……か」・「もし……もや」の文型に  
おいては一方では「危惧懸念」の普通一般の意味を有しながら、  
他方右にあげたごとき文例(8)(9)(10)(11)(12)の「期待」の意味をも有  
していることが注意されるのである。この事実をもつて文例(7)  
における「もし……もこそ」の呼応した文型を考えるに、この  
場合の用法としての「もこそ」が例えば「もや」に置き換えら  
れて、「もし世におはする事もやとて」となつたとしても、そ

の實質的な意味においては何らかわりはないとみとめられるの  
であるから、文例(7)の文型は、一方に既に存在する「もし……  
や」・「もし……か」・「もし……もや」の文型と「危惧」と  
いう点で共通性を有するので混同されやすい状態にあつたため  
に、後者の文型のもう一つの意味「期待」が前者の文型「もし  
……もこそ」に波及して行つたものと考えられる。つまりこの  
ように考えると、「もし……もこそ」の形式は本来的のもので  
はなく、他の類似形式より派生した二次的なものであるといわ  
ざるを得ない。

以上の点よりして、「もぞ」・「もこそ」に直結する述語に  
推量の助動詞等が用いられないということの理由として、「も  
し」と呼応するという事から説明を加えるのは少々無理ではな  
からうか。

むしろ、それより江口氏もすでに指摘された伊牟田氏の説に  
注意すべきであらうと思われる。古今集の歌で、

(13) かずかずに我をわすれぬものならば山のかすみをあはれと  
はみよ(857)

(14) みちのくのあだちのまゆみわがひかばすゑさへよりこしの  
びにしのびに(1078)

の事例のごとく、前件に「もし」を伴わない仮定条件を用いて  
いながら、その結びともいふべき述語において「みよ」「よ  
りこ」のごとく推量の助動詞を用いずにも動詞の原形(こ、  
こ、では二例とも命令形)を用いて文を終止している。このよ  
うな形式は既に万葉集にも見られるところであり、いずれも命  
令・禁止・願望などの希求の気持をのべる場合に用いられてい

る。更に次のような万葉集の事例に注意しなければならぬ。

(15) 人ならば母が最愛子そ(人在者、母之最愛子曾) あさもよし紀の川の辺の妹と背の」(七、<sup>(1209)</sup>)

(16) 手折らずて散りなば惜し(手折而、落者惜) とわが思ひ

し秋の黄葉をかざしつるかも(八、<sup>(1581)</sup>)

(17) おくれ居て恋ひば苦しも(古非波、久流思母) 朝狩の君が

弓にもならましものを(十四、<sup>(3568)</sup>)

(18) わが背子は玉にもがもな手に巻きて見つつ行かむを置きて

行かば惜し(於吉氏伊加婆乎思) (十七、<sup>(3990)</sup>)

(19) わが背子しかくし聞さば(可久志伎許散婆) 天地の神を乞

ひ祈み長くとそ思ふ(奈我久等曾於毛布) (二十、<sup>(4499)</sup>)

文例(15)(17)は作者不明歌(但し、(17)の方は防人歌の中、問答の歌)、文例(16)は橘朝臣奈良麿、文例(18)は大伴家持、文例(19)は中臣清麿朝臣の各作歌である。いずれも前件に「もし」を伴わない仮定条件を用いながら、文例(15)は、「母が最愛子そ」と係助詞「そ」を用いて指定し強調して居り、文例(16)(18)は、「惜し」という形容詞の終止形を用いて自己の感情を強調し表現している。(文例(18)の左注、「右、守大伴宿禰家持、以正税帳、須入京師、仍作此詞、聯陳相別之嘆」よりして、その「惜し」という感情は、「相別之嘆」であることがわかる。)文例(17)は「苦し」という形容詞の終止形に更に係助詞「も」がついて強調表現になっている。文例(19)は、「長くとそ思ふ」と動詞の原形(この場合は「そ」の結びで連体形。)を用いることによって、作者(中臣清麿朝臣)自身の意志の力強さを表現している。すなわち、仮定条件と呼応する述語の中で、確定的・

必然的な強調表現が古くから存在していたものと考えられる。

このような事実に立って「もぞ」・「もこそ」に直結した述語の性格を考えた場合、それが推量の助動詞等を用いないということの理由として、疑問副詞「もし」との呼応関係で説明するよりもむしろ古くから存在したと思われる「もし」を伴わない仮定条件との呼応関係の上で説明するのが当を得ているのではあるまいか。「もぞ+述語」、「もこそ+述語」の形式が一方において「未来への志向」をその性格として有していることは、既述したごとく仮定条件との呼応があるからであって、それが更に「不安」・「懸念」の意味をも持ち得るのは「もぞ」・「もこそ」の「も」の語性によるものと考えられる。

以上の考察よりして、「もぞ」・「もこそ」の文型においてその意味を吟味するにあたって仮定条件との呼応関係の上に立つてなすべきことが大事なことであろう。そこで、実際の作品にあらわれる「もぞ」・「もこそ」の文型を解釈する場合どのようにしたらよいか、以下具体的ににあたってみよう。

### 三

すでにあげた文例(1)・(6)についてまず検討してみる。既述したごとくこれ等はいずれも前件として「もし」を伴わない仮定条件を用いて、それが「もぞ」・「もこそ」に直結する述語と呼応した事例であるから、「危惧懸念」の意味を持つものと考えられる。

文例(1)は男に忘れられた女が、その男にかした自分の着物を送りかえされたので、うらめしい気持ちこめてよんだ歌であ

る。

「いいえ、もう着たいとは思いません。誰かの肌になれた狩衣ですもの。(それを着て)ひよつとしてわたしの肌にも触れたらいやな臭がつくといいけませんから。」

と口語訳してよからう。「うきかもぞつく」が前件の「わが身に触れば」という「もし」のつかない仮定条件と緊密に呼応していることがわかる。尚、この事例は、富士谷成章が「あゆひ抄」においてすでに指摘したもの一つである。

次に、文例(2)は、中宮定子の昔語りの中にあらわれる一節で、宣耀殿の女御の古今和歌集に関する知識を村上天皇が試みられたところ、そのあまりの通曉ぶりに天皇は舌をまかれ、「いかでなほすこしひがごとみつけてをやまん」と意地になつていらつしやる場面である。ここのところを松尾聡氏が「ホカノ本ヲ照合ナサルトイケナイ(または、グアイのワルイコトニ、恐ラク十中十マデホカノ本ヲ照合ナサルニキマツテイル)」<sup>(注11)</sup>という風に確定的な表現で訳して居られるのがよく、日本古典文学大系の校注者池田亀鑑、岸上慎二両氏のごとく、<sup>(注12)</sup>「明日になつたら女御が別の本を参照なさると考えられて」と訳したのは天皇の「ひがごとみつけて」やろうというお氣持にそつた解釈とはいえず、不十分といわざるを得ない。なおこの所、本文に異同があつて、古典大系の底本である三卷本(一類)系統の岩瀬文庫蔵にかかる柳原紀光筆本などでは、「ことをぞ見給ひあはする」とあり、前田家本では、「ことをも見給ひあはする」とあつて「もぞ」が見えないが、能因本系統の代表的な伝本である学習院大学蔵三条西家旧蔵本では、「ことをもぞ見給ひあは

する」とあつて「もぞ」の二字が見え、<sup>(注13)</sup>文例(2)についてはこの本文を用いた次第である。何故ならば、仮定条件を前件として有する本文の結びを文脈の上から吟味した場合、「もぞ」の方が一番おちつくからであつて、本来的にこゝは、「ことをもぞ見給ひあはする」とあつたものと判断したい。

文例(3)は宇治拾遺物語の事例で、先祖が語りついできたという「この卒都婆に血のつかん折になん、この山は崩れて、ふかき海となるべき」との父の遺言を、一老婆が忠実に守つて、七十余年、日ごとに山のいたゞきにある卒都婆をおとずれてきたその言動にわかい男達が不審を抱いてたずねたので、この老婆がそのわけを説明しているところである。老婆の言動をばかにした男たちに「おそろしきことかな。崩れんときは、告給へ」と言い、男たちがわざと血をぬりつけた卒都婆を見て「色をたがへて、倒れまろび、はしり帰て、さげびいふ」老婆の「危懼感」は文例(3)の「死もぞする」を「必ずや死んでしまふであらう。(ああ、こまつたことになつた。)」

と訳することによつてはじめてより鮮明に印象づけられるのではないだろうか。

文例(4)は、拾遺集卷十一所収、題しらず、よみ人知らずの恋歌である。この歌は、「命だにあらば」に注意すると一見、相手に逢えることを「期待」しているかのごとくうけとられるが、文の形式からみて、「もし」を伴わない仮定条件に呼応するものが「ありもこそすれ」という推量の助動詞を伴わない述語にすぐ上接する「もこそ」であることを考えに入れると、「期待」

の意味にとるべきではなく、やはり「危惧感」をもった表現として理解すべきではなからうか。松尾氏が「思ふにし死にするものにあらませば千度ぞわれは死にかへらまし」という万葉集巻四に見える大伴家持に贈った笠女郎の歌廿四首の中の一書を引用しながら、「何とかして、しばらくこの恋の苦しき切なさを忘れて、身を苦しめ、衰弱させることをとどめよう。このま、命だけでも生きながらえているなら、(みじめな衰弱し切った身で)いつか又あの人と逢う時があるといけないから」と「危惧」の意味としてとって居られるのはさすがである。ただし、松尾氏自身、右の解釈にいたるまでにはいろいろ難渋されたごとくで、昭和30年2月発行「武蔵野文学(一)」、更に、昭和39年5月発行の氏の校注になる「浜松中納言物語」の補注(日本古典文学大系77巻)では「危惧」、「好ましくならぬ予想」の意にはとりがたい事例として言及して居られる。しかし、私は既述した通り、仮定条件と「もこそ」文型の呼応関係より考えて、このところは当然「危惧感」のこもったものとして理解したのであり、それも、「いつか必ずや……」のごとく確信的な気持ちがかもっているとみないのである。

同様な立場から文例(5)(6)の「もこそ」・「もぞ」を眺めると、こ、でも松尾氏の立場を支持したい。

文例(5)は、拾遺集巻一、春の歌で、作者は藤原長能、「権中納言義懐の家の桜の花惜む歌よみ侍りけるに」の詞書がついてゐる。本居宜長は、この歌を「あやぶむ意なき」の事例としてとりあつかっているのであるが、それでい、であろうか。文例(5)の歌は、多分に儀礼的な歌で、歌そのものに作者藤原長能の実

感がつよくこもった歌としてみるよりも、むしろ「身にかへて」という表現態度には言葉をもてあそんでいるところがあつて思われる。そのため歌の後半「いけらば後の春もこそあれ」とのつゞきが少し無理をしていると思われる。その点を配慮して口語訳してみると、

「私自身の命に代えてもい、というくらいに気持で、たゞもうむやみやたらとあなた(権中納言義懐)のお家の桜の花の散るのを惜しむことだなあ。(でもたとい生命をすてたからとて桜の花の咲く春がそれつきり来ないわけではなし、あいかわらず春は毎年やつて来るでしょうから)このま、生きながらえたとしたら、また桜の花の咲く春にめぐりあい、再び花の散るのを惜しみがめるはめになるでしょうよ。こまつたことですよ。」

のごとくなり、「再び身にかえる程の悲しみにあうのではないか」という危惧感としてとるべきであろうと思われる。

文例(6)は、後撰集巻五、秋上所取の題しらず、読人しらずの歌ではあるが実際は、恋の気持ちをよんだものである。松尾氏は、はじめこの事例を「古文解釈のための国文法入門」(研究社学生文庫)で、「危惧懸念」の気持ちをあらわさぬ例外的事例としてあげられた由であるが、それを訂正して、「ズウツト後タマデ若シ恋慕シツツケデモスルナラ、行末ツライ目ヲミルトイケナイ、ダカラ先方デシミジミトイトシイト思ツテケレルウチニ早ク逢イタイ。」と口語訳して居られる。そして更に「もぞ十動詞の原形」について、「自分にとって都合のわるいこととがらが将来おこることについてほとんどその蓋然性が確定に

近い程度にまで片よっていることについていうのではないか」と言及して居られるが、私も既述した通りの理由（万葉集における仮定条件とその述語との呼応関係にみられる確定的・必然的表現）からこの考えを支持したい。よって右の文例は「行末きつと、つらい目をみるかもしれない。それではこまる」のごとく確定的表現を明示するのがよからうと思われる。

以上、文例(1)より文例(6)までの「もぞ」・「もこそ」の文型についてその意味を検討して来たのであるが、今すこし、同じ文形式の他の事例をながめてみたい。

(20) 玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶる事のよわりもぞする（新古今集<sup>(1034)</sup>

(21) 秋山の清水はくまじにこりなば宿れる月の曇りもぞする（詞花集<sup>(103)</sup>

(22) かくばかりうきを忍びてながらへばこれより勝る物もこそ

思へ（新古今集<sup>(181)</sup>

(23) かひなくてとしくればはつるものならば春にもあはぬみとも

こそなれ（蜻蛉日記<sup>38</sup>

(24) おりすぎてさてもこそやめさみだれてこよひあやめの根を

やかけまし（和泉式部日語<sup>44</sup>

いずれも文例(1)・(6)と同様に、「もし」を伴わない仮定条件を前件に有する「もぞ」・「もこそ」の用法である。

文例(20)は「百首の歌の中に忍恋を」の詞書のある式子内親王の著名な歌であつて、「危惧感」をあらわす「もぞ」の事例としてよくあげられる。又、富士谷成章もその「あゆひ抄」の中でつとに引用し、注意した歌である。この歌は第二句「絶えな

ばたえね」で一応切れるのであるが、第三句以下を口語訳する場合に、

「かりに（生命が絶えずに、このまゝ、生き）ながらえたとしたら、じつとたえしのんでいる私の恋心がゆるんでしまつて（つい表面にあらわれてしまふかもしれない。それでは困りますよ）」

というように、第三句めの「ながらへば」を第二句の「絶え」という語をもつて補い訳するとその意がつくされると思うのである。仮定条件は「もぞ」の文型に呼応して緊密な働きを有しているから、その仮定条件を口訳する場合においても意をつくすよう十分配慮すべきことを言いたいのである。

文例(21)は、詞花集卷三、秋所収の歌。作者は藤原忠兼、「月浮山水」といふ心をよめる」の詞書がある。宜長が「詞の玉緒」で「あやぶむ意」として既にあげた事例。この歌においても、「清水はくまじ」で切れる、いわゆる二句切れの歌であるから、文例(20)と同じ構成であることがわかる。その点に注意して、第三句以下を口訳すると、

「かりに（清水をくんで）それがにこりでもしたら（清水に）宿りうつっている月がきつと曇つてしまふでしょうよ。（それでは困ります。）」

となるであろうか。

文例(22)も同じく宜長のあげた事例である。「尼にならむと思ひたちけるを人のとめ侍りければ」の詞書あり。作者、和泉式部。

「これほどのつらいめをじつとたえしのんで、（尼にもなら

ず。に。かりに生きながらえんとするなら、ゆく先、今まで以上のつらい思いを必ずやすることでしょう。それでは困ります。」

文例(23)は、道綱の歌。道綱が、「いとせめておもふ心をとしのうちにはるくこともしらせてしがな」と言い送つても、いっこうに色よい返事を与えない八橋の女に与えた歌である。

「よい返事もいたゞけず、このま、年がくればはてしてしまうのでしたら、こまつたことに（私は恋しい気持ちにたえきれず死んでしまつて、やがてやつてくる）春にもめぐりあえない身にきつとなつてしましますよ。」

文例(24)は日本古典文学大系20巻の底本となつた三条西家本系統では「おりすぎて」であるが、一方、応永本系統の諸本では、「をりすぎば」と仮定条件になつている。「もぞ」・「もこそ」と呼応すると思われる仮定条件ということを考慮に入れた場合、応永本系統の本文の方がわかりやすいと思われるが、三条西家本系統の諸本が原典により近い姿を保つていてという説を考慮に入れてみると「をりすぎば」が本来のものであつたかは断言できない。しかし、遠藤嘉基氏が「時がすぎたら、そのまま不用になりましよう。だから、今夜のうちに菖蒲の根を引いて袖にかけましよう。」というように「おりすぎて」を仮定条件として訳されているのは、「おりすぎて」の意味を自から語るものといえよう。

以上、「もぞ」・「もこそ」のうち、前件として仮定条件を有する文について、呼応関係の立場から「もぞ」・「もこそ」の意味を追求し、更に具体的な解釈の方法を示した。しかし、

「もぞ」・「もこそ」の用いられている文には、右のごとき仮定条件が用いられるとは限らず、むしろ、仮定条件の用いられない場合がかなり多いようである。しかし、既述の呼応関係の立場からながめた場合、なる程、仮定条件は表面にはあらわれてはいないが、それは文脈の上から、あるいは歌調の上から省略されたと考えられるものが多く、そこに用いられた「もぞ」・「もこそ」は、その省略された仮定条件と呼応していると考えられる。故に仮定条件の用いられない「もぞ」・「もこそ」の文について解釈をする場合、その省略された仮定条件を表面に出すことによつて「もぞ」・「もこそ」の呼応関係の上でとらえると意を尽すものと思われる。たゞし、与えられた枚数もつきたので以下二三の事例をあげて若干の説明を加え、終りたいと思つた。

#### 四

(25) 「くれたる人もぞくる。ありつるおとももぞかへりくる。」  
など、あやふくおぼえければ、(古本説話集下長谷寺参詣男12)

(26) 雨の降り侍りつればさも侍りつらん。よしよし、またおほせられかくる事もぞ侍る。まかり立ちなん。(枕草子大進生昌49)

(27) 梅の花よそながら見む吾妹子がとがむばかりの香にもこそしめ(後撰集(2))

文例(25)は、民話「わらしべ長者譚」として人口に膾炙し、今昔物語、宇治拾遺物語・雑談集などの説話文学にも収められている有名な話である。本事例は「もぞ……もぞ」と同じ用法が重複して居り、そのあとすぐに「あやふく」とあつて「危惧感」

を示していること明らかであろう。なお本事例の数行前にも「思ひもぞかへすとやおもひけむ、ぬのをとるまゝに、みだにもかへらずはしりていぬ。」と用いられ「もぞ」の多用されていることでも特色がある。さて、こゝは布一むらと交換して死んだ馬を手に入れた青侍が長谷観音に祈願すると活きかえつたため嬉しいと同時に先の馬の所有主の心変りが不安になり、それが文例(25)として表現されているわけである。仮定条件は用いられないが、文例(25)はそのあとつづけて「やう／＼かくれのかたへひきいれて、ときはるまでやすめて……」とあり、このことばをもとにして考えると、「このまゝ、ぐずぐずしてこゝに居ると」の意の仮定条件が含まれていると考えられ、これが「もぞくる」、「もぞかへりくる」の各々に呼応して居ると考えられるのである。よつてこゝは、

「(このまゝ、ぐずぐずしてこゝに居ると) 一行におくれた人が今にもやつて来るかもしれない、今さっきの男が(心変わりして)ひきかえしてくるかもしれないと不安に思われたので、」と訳してはいかゞであらう。これと同じように、文例(26)は「もぞ侍る」の次にあらわれる「まかりたちなん」に着目し、文例(27)は、第三句より以下が上二句「梅の花よそながら見む」の理由であることに注意して、それ等の語句をいかして仮定条件句を考え口訳すると

(26) 「まあい、さ(退。出。せ。(まかりたち)ず。に。これ。以上。こゝに。居。て。あ。な。た。の。相。手。を。し。た。な。ら)またきつと難題でも出され

(27) 「梅の花を遠くから見よう。(かりに遠くはなれて見(よ

そながら見)ずに、すぐ近くで見るとしたら)あのこが非難しとがめるくらいに香に身がしみてしまうと困るから。」「もぞ」・「もこそ」の解釈について言うべきことを多く残した感がする。他は別の機会にゆずる。

註

- 1、拙稿「平安時代における「もぞ・もこそ」の用法」(大分高専研究報告第三号、昭和43年11月)
- 2、「増補本居宜長全集第九」(吉川弘文館)所収「玉のを三」(98頁)「玉のを五」(165頁)
- 3、松尾聡著「平安時代物語論考」(笠間書院、昭和43年4月20日)所収「付録(平安時代仮名文学作品の語意とところ)の中、「4、枕草子のもぞ・もこそなど、補記―源氏物語のもぞ・もこそなど。」(570頁600頁)
- 4、注1に同じ
- 5、注2同書98頁
- 6、注3同書572頁
- 7、江口正弘「もぞ・もこそについて」(国語研究紀要、創刊号、昭和41年11月12日)
- 8、注1に同じ
- 9、日本古典文学大系77巻(岩波)474頁
- 10、伊牟田経久「もぞ・もこそ考」(国語六の一、昭和32年9月)
- 11、注3、同書574頁
- 12、日本古典文学大系19巻(岩波)62頁頭注
- 13、注3同書574頁

14、注3 同書 596 } 597 へ

15、注3 同書 572 へ

16、日本古典文学大系 20 卷（岩波）404 へ頭注

17、最近刊行された「日本古典文学全集」（小学館）の「和泉式部日記」

93 へで、藤岡忠美氏が新説としてあげて居られる訳は、条件表現に注意しては居られるが、「もこそ」を、「危惧」の意に解して居られない点、同意できない。

— 本稿は、昭和四十六年六月、九州大学国語国文学会にて口頭発表したものの一部である。 —